

## マヤ興亡：文明の盛衰は何を語るか？

著者	八杉 佳穂
発行年	1990-08-16
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5663">http://hdl.handle.net/10502/5663</a>

# マヤ興亡

文明の盛衰は何を語るか？

八杉佳穂

Fukutake Books

22

福武書店

目次

はじめに 7

第一章 暦の予言 11

第二章 過去への糸口 31

第三章 文明の勃興 63

第四章 爛熟の時代——古典期 85

第五章 激動の時代——後古典期からスペイン人の征服期 115

第六章 生業、交易 137

第七章 社会組織 155

第八章 暦と文字 177

第九章 神々の世界と儀式 207

第十章 マヤ文明の崩壊 239

おわりに 263

参考文献

地図・イラスト 相澤裕美

本文中の写真は、すべて著者撮影によるものです。

## はじめに

私がマヤ文明にとりつかれた時、うかつにも、マヤ文明というのは、もはや死んだ文明であり、まさか現代にその子孫がいるとは思ひもしなかった。それにマヤなど、たしかに有名ではあるが、学問の対象としてみる人は少ないので、マヤに関する文献も少ないに違いない、ということは読まなければならぬ本も少なく、楽に違いない、これはいい対象を見つけたものだと思つたものである。

ところが、研究を始めてまもなく、マヤ人が実際に存在していることを知り、かつまた、マヤ研究は、おそらく新大陸で一番多く文献が蓄積された分野であることを知つたのである。そういうえば、小さいとき、チューインガムの宣伝でチクレを採るマヤ人の姿を見たなと思ひだした。そして、我が国でも、マヤ文明に興味を抱き、本や記事を残した人が、岡田峻氏をはじめ、結構沢山いることも知つた。

私は生来の怠け者なので、マヤ文明に私の一生を賭けてもいいと思つたものの、文献の多さには、いまだにまいつている。一生かかっても読み切れないほどの文献の山なのである。それを読んでいくことは、私の怠け癖を改めるのにかえつてよいことだと思ふのだが。

マヤの研究といつてもいろいろある。私はその不思議な美しい文字を何とか理解したいと思

ったので、言語から始めることにした。文字というからには、それを使った人の言語が反映しているはずであり、マヤ文字というからには、マヤのことばであるはずであり、文字を知るまえに、その言語の特徴を知る必要があると思つたからである。比較言語学の方法で、マヤ祖語の状態を再構成し、変化のあとをたどり、文字が書かれた時代の言語を再構成することはできないだろうか。文字が読めれば、比較言語学の方法の証明になるであらうし、言語を知れば、文字の解説に大いに貢献するであらう。両者はお互いにもちつもたれつの関係で、たいへんおもしろい対象だと思つたのである。

それからもう二十年近い歲月がたつてしまった。いまだになにもわからないところをうろろろしている感じであるが、最近マヤ文明の研究者が増えるとともに、よい概説書が数冊でて、マヤ文明がつかみやすくなつてきた。とはいえわが国では、まだマヤは不思議な文明である。いまだにその不思議さを強調して、世界の七不思議的な、猟奇的な見方が幅をきかせている。マヤはマヤカシのマヤなんでしょうといわれる始末である。癩である。そんな癩の種がどんどん育つて、彼ら欧米の学者に負けない概説書が自分の手で書けないものであらうか、と考へていたところに、マヤ文明について何か書いてみませんかという優しいお誘いがあった。

よい概説書というのは、その分野の権威が書けばいいと思つてきたのであるが、別に私のような浅学非才の者でも、書けば勉強になるではないか。かの有名な大権威者トンプソンだつて、研究を始めてまもなく、概説書を出しているではないか。なにもおそれるにはたらぬ、と自分

を鼓舞しながら書くことにした。マヤへの思い入れが強いだけに、まちがいのない、正しい、りっぱな本をいつか書きたい、それまでは勉強と思ってきたのであるが、その願いは、いつまでたっても叶わぬものである。だから、勉強になる、という軽い気持ちで書くことにしたわけである。

しかしながら、マヤ文明の範囲は広い。とても一人の力の及ぶところではない。私の知識は文字、言語、考古学、民族学といくに減っていくのであるが、マヤ文明を扱うにはそうしたものをカバーしなければならぬ。幸いというべきか、本書の形式が選書というところから、詳しい記述を行なうことができなかつた。本書の多くは消化不十分な文献によつているので、まちがいがたくさんあるに違いないと心配しているのであるが、私の浅学を隠すには都合のよい言い訳ができたのである。

中米で、オルメカやマヤ、アステカ文明などの文明が栄えたことは、すでに有名であり、いままさら、言う必要もないほどであるが、中米の北や南では、それに匹敵する文明は起こらず、中米の中心部でしか、文明は栄えなかつた。メソアメリカとは、そうした文明が栄えた、中米の中心部を指すことばである。そこにはいくつかの共通する要素がみられる。たとえば、二六〇日曆、三六五日曆という曆、二十進法、球戯、トウモロコシを基盤にする生業体系など、共通の文化要素を、すぐさま幾つも挙げるができる。しかし、それぞれの地域で、それぞれ



特徴ある文明が築かれたことも確かである。

マヤ文明は、そのメソアメリカの中でも、東の端で生まれ、発展し、滅びた文明である。マヤ文明は、発達した文字をもっていたばかりか、建築や土器生産などの芸術性などにおいても、他を寄せつけない素晴らしさをもっている。しかし、そうした文字や芸術品といわれるものは、マヤ文明の独創品ではない。それらはメソアメリカの他の文明の刺激を受けて、発展させたものである。ちょうど日本人が獨創性に劣るが、模倣性や改良の才に優れているのとよく似ている。日本が東アジアの東端に位置するように、マヤもメソアメリカの東端に位置するのは、偶然の一致にしては、あまりによく似すぎている。文化は西から東に流れている。そしてふきだまりともいえる東の端で、両者は、見事な創造性を発揮している。

マヤ文明は、決して独自に発達した文明ではなく、メソアメリカの他の文明から絶えず影響を受けながら、発展した文明である。それゆえ、メソアメリカ全体に目を配りながら、マヤ文明は理解されなければならない。マヤ文明の興亡の歴史は、文明史、または比較文明学にとつても、たいへん興味深い。選書という限られた形式のなかで、どれくらいできるのか、いささかこころもとないが、そうした気持ちだけは忘れないで、マヤ文明について記述してみようと思う。